The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	子どもー大人関係研究序説 ： 『児童の世紀』の受容史とその今日的意義について
Author(s)	岡部, 美香
Citation	大阪大学, 2000, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/41987
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【11】

氏　　名	岡　部　美　香（おかべ みか）
博士の専攻分野の名称	博　士（人間科学）
学　位　記　番　号	第　15121　号
学位授与年月日	平成12年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 人間科学研究科教育学専攻
学　位　論　文　名	**子ども－大人関係研究序説** **－『児童の世紀』の受容史とその今日的意義について－**
論文審査委員	（主査） 教　授　平野　正久 （副査） 教　授　菊池　城司　　助教授　藤川　信夫

論文内容の要旨

今世紀初頭に世界各国で生起した新教育運動は、子どもを教育活動の原点に据えるという視点、すなわち「子どもから」の視点を、教育および教育学の領域に導入した。この視点の導入は、子どもを自律的な主体と捉え、その自己活動による自己形成を重視することによって、悪しき権威主義に陥っていた旧来の子どもと大人の関係を解体し、双方の生を充実させうるような子ども－大人関係の再構築への可能性を開くはずのものであった。今日のわが国の教育シーンでは、このような「子どもから」という視点のもとで教育のあり方を考えることの重要性が、ほぼ自明の前提となっているように思われる。それにもかかわらず、子どもと大人の関係が、どこか息苦しく、ときに病んでいるようにさえ感じられるのはなぜなのだろうか。

この問題の原因は、従来、社会構造や生活様式の変化、それにともなう地域や家庭の教育力の低下などのように、教育の「外部」に求められてきた。しかし、それは、教育の「内部」の構造のうちにも見出せるのではないだろうか。換言するなら、「子どもから」という視点そのものに、子どもと大人、双方の生を充実させうるような世代関係の構築を阻害する機構がすでに存在するのではないか。

そこで本論では、いま一度、「子どもから」という教育（学）的な視点が構成された今世紀初頭の新教育運動期に立ち返り、この視点がどのような連関のなかで構成されたのか、また、この視点のもとで結ばれる子どもと大人の関係がどのような構造をもっているのかについて考察しようと試みた。具体的には、今世紀初頭の新教育運動期に「子どもから」という視点を新たに開いた著作として知られるエレン・ケイ（Key, Ellen Karolina Sofia 1849－1926）の『児童の世紀』（Barnets århundrade 1900）に焦点を当て、この著作のなかに抽出された子ども－大人関係の構造を、社会的、思想的コンテクストに照らしながら、その記述に即しつつ解明することを目的とした。

まず、本論の前半部分では、日本における『児童の世紀』の出版状況および受容状況について、これに影響を与えたスウェーデンおよびドイツの状況とともに分析し、その特徴を考察した。というのも、『児童の世紀』が誰によって、どのような著作として受容されてきたのかを把握しておくことは、この著作に展開されたケイの教育思想を理解するための不可欠の前提であると同時に、そのための有力な手がかりになると考えたからである。また加えて、『児童の世紀』は、多数の邦訳書が出版されていることからうかがえるように、戦前、戦後を通じて日本で多くの人々に親しまれ、かつ教育学研究においてもしばしば言及されてきた著作であるにもかかわらず、この著作が日本の教育界に及ぼした影響について、これまで体系的に明らかにされていなかったからでもある。

第一章ではスウェーデン、第二章ではドイツにおける『児童の世紀』の出版状況、受容状況、および研究動向を、この著作あるいは独訳書の初版出版時から現代までを通して概観した。

日本を対象とした第三章では、『児童の世紀』が、1906年（明治39年）にはじめて紹介されてから現代まで、スウェーデンあるいはドイツからの影響を受けつつも、その時々の日本の政治的、社会的体制に強く規定される形で解釈され、意味づけられながら受容されてきたこと、そして、大正初期以降、現代にいたるまで、この著作の受容母体となったのは、主として子育てに従事する母親たちであったことが明らかにされた。

第四章では、前半部分の考察をふまえつつ、日本を中心に先行研究を整理した。そこから、子ども－大人関係に焦点づけながら『児童の世紀』の記述分析を行うには、教育主体である大人、『児童の世紀』の場合はとりわけ母親に着目する必要があるという課題が抽出された。これは、この著作に展開されたケイの「子どもから」の教育思想を検討するには、母性の意義を強調することによって女性を解放しようとした彼女の母性主義思想との関連に留意する必要があることを意味するものであった。本論の後半部分では、この課題にしたがって考察が進められた。

第五章では、従来、教育学の領域において十分に考慮されてこなかったケイの母性主義思想を俎上に載せ、彼女の説いた母性概念をその社会的、思想的、そして彼女の個人史的コンテクストに照らしつつ再構成し、さらに彼女の母性復興の試みについて検討した。それを通して、第一に、ケイの母性主義思想が、当時のスウェーデンにおける女性解放の事情、およびケイ自身の人生における出会いや社会活動体験との密接な連関のもとで形成されたのだということ、第二に、その思想の内実が、母親を、人類の進化という目的にしたがって自発的に自己規制する主体的な存在として描き、子どもの産育を、家庭外で男性が従事する生産労働に匹敵するような経済的評価に値する社会的事業として捉えることによって、家庭における母親の地位の向上を図ろうとするものであったことが導き出された。

第六章では、ケイのこのような母性主義思想との関連に留意しつつ、『児童の世紀』のなかで子どもと大人の関係がどのような構造をもつものとして描かれているのかを、この著作の記述に即して解明することを試みた。ここでは、彼女の母性主義思想との関連に留意する視座から、子どもと大人の関係を、子どもと母親の関係に限定して考察を行った。

まず、『児童の世紀』によって開かれたといわれる「子どもから」の視点が、進化論の同時代的解釈を背景に、子どもを、生まれる前の子どもも含めて、おのずから現存の人類である大人よりも発達し、さらに高次の人類になるはずの存在として捉える視点、すなわち子どもをその根源から自律的な主体として捉える視点であったことを明らかにした。

この視点のもとで結ばれる子どもと母親の関係は、おのずから発達するはずの自律的な主体である子どもを、母親が意図的な働きかけによって他律的に形成するというパラドクシカルな構造をもつものであった。自律的な主体を他律的に形成するというパラドックスは、成人性を自律という概念で特徴づける啓蒙主義を背景とし、同時に子どもを自律していない未成年状態にある者として発見した近代教育が必然的に内包するパラドックスである。ケイは、子どもをその根源から自律的な主体として捉えるとともに、子どもの発達を「大人を超えてより高次の存在へ」という方向に限定していたために、逆に、子どもの自然そのものを操作する性淘汰と母親の「教育的配慮」がすみずみにまで行き渡っている空間への子どもの囲い込みとを正当化し、近代教育の自律と他律のパラドックスをより先鋭化させていたように思われる。

また、ケイは、母親たる女性には、大人を超えてより高次の存在へと向かうはずの子どもの自然な発達を十全に保障する義務があると主張したが、同時に、この義務を果たすことが、女性自身の権利獲得および地位向上を要求する根拠になるという論を展開し、母子を一体として解放しようと目論んでいた。ところが、ケイの論にしたがえば、女性は、自分の権利を主張しようとすればするほど、子どもの自然な発達が大人を超えてより高次の方向へ向かうよう、子どもに対して意図的に働きかけなければならなくなる。したがって、ケイの母子一体の思想は、子どもと母親を上述のようなパラドクシカルな関係にますます強く拘束するものとして機能しかねないものであったことが示唆された。

一方では、必ずしもパラドックスの様式では捉えられないような、模倣という行為を媒介とした子どもと母親の関係も『児童の世紀』のなかでは描かれていた。しかし、この模倣を媒介とする関係は、子どもが自律的な主体であることを前提としてはじめて成立するものであるがゆえに、結局、『児童の世紀』における子どもと母親の関係は、自律と他律のパラドックスから逃れうるものではないことが指摘された。

終章では、以上のような考察から、今世紀初頭の新教育運動期に『児童の世紀』が開いたという「子どもから」の視点そのものに、子どもと大人、双方の生を充実させうる世代関係の構築を阻害しかねないような、自律的な主体を他律的に形成するというパラドクシカルな機構がすでに存在していた、という結論が得られたことを示した。さらに、「子どもから」という視点を保持する限り、自律と他律のパラドックスから完全に脱却することが難しい以上、私たちは、このパラドックスを引き受けながら、子どもと大人、双方の生を充実させうるような世代関係のあり方を求めていく必要があるだろうが、そのための有意義な示唆が『児童の世紀』のなかに見出しうることを指摘し、ここに『児童の世紀』の今日的意義があることについて論じた。最後に、こうした今日的意義をふまえつつ、今後に残された課題について言及した。

論文審査の結果の要旨

本論文は、現代教育の課題にかかわる「子ども－大人関係」の解明をめざしつつ、その主要な手がかりをスウェーデンの社会思想家エレン・ケイ（1849－1926）の教育思想に求めたものである。とりわけ、今世紀初頭の新教育運動期に「子どもから」という視点を新たに拓いたとされる彼女の著作『児童の世紀』(1900年刊）に焦点を当て、そこに抽出された子ども－大人関係の構造を、社会的・思想的コンテクストに照らしながら、その記述に即しつつ解明することを目的としているが、この視座と方法に本研究の優れた特徴が認められる。

本論文の前半部分では、スウェーデン、ドイツおよび日本における『児童の世紀』の出版・翻訳・受容状況に関してきわめて精緻な文献調査と論究がなされており、その研究成果をふまえて、さらに後半部分においては、ケイの母性主義思想との関連で「子どもから」の思想の意味内実が深く究明されているが、以上の二点において、本論文には、従来の研究水準を越える独創性が認められ、エレン・ケイの教育思想に関する、わが国における初めての本格的研究として高い評価を与えることができる。

以上の理由から、本審査委員会は本論文を博士（人間科学）の学位授与に十分に値するものであると判定する。